

國學院大學學術情報リポジトリ

韓国新宗教研究の最近の動向：
機関誌『新宗教研究』の内容から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 和珍 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001773

韓国新宗教研究の最近の動向 — 機関誌『新宗教研究』の内容から —

李和珍

はじめに

韓国新宗教学会^①は1998年12月に設立され、1999年3月に創立大会を開くなどの活動を開始した。同年12月には学会の機関誌として『新宗教研究^②』が創刊された。2009年2月7日に、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所等との共催で、國學院大學学術メディアセンターを会場に「東アジア新宗教国際学術会議—東アジア新宗教研究と情報リテラシー」が開催された^③。日本との研究交流を推進しようという意向があったからである。韓国新宗教学会がこのような志向性を持っているので、日本の宗教研究者も韓国研究者がどのような教団を対象とし、どのような研究方法が中心的であるかについて、より深く理解していくことが必要と考えられる。そこで本稿においては、韓国新宗教学会の機関誌の内容を概観し、現在におけるおおよその研究動向を紹介することにしたい。韓国の宗教研究者がこの間に新宗教を対象として、どのような研究を行なってきたかが、機関誌にも反映されていると考えるからである。

以下では、毎年2回刊行されている『新宗教研究』について、創刊号から2008年の第19輯までに掲載されている10年分の内容を紹介するとともに、そこに見られる研究傾向を検討してみたい。機関誌の構成を大別すると、研究の成果を示したものは、「特集」、「研究論文」、「新宗教資料」の3つのカテゴリーに分けられる。この他に「書評^④」も掲載されている。毎号の「特集」は、内容的に見ると、大きく2つに分けられる。1つは学術大討論会、定期学術大会、国際学術シンポジウムの紹介の類であり、もう1つは毎号決められた特定のテーマに沿っての個々の論文である。特集として組まれる研究テーマは、同学会が一定の問題意識から焦点を当てて研究しようとしているものであると考えていいだろう。「研究論文」は、当然ながら韓国の新宗教を研究対象としたものが大半であるが、日本あるいは中国の新宗教について論及したものも、一定程度ある。「新宗教資料」には19輯までの中に、15回にわたって様々な教団の資料紹介がある。また特筆すべきは、天理教を対象としたものの紹介が7本あることである。

この3つのカテゴリーの中で対象となっている教団、とくに扱われている頻度に注目することで、どの教団がとりわけ研究者の注目を集めているか、あるいはどの教団に関係する研究者が多いのかといったことがわかると考えられる。教団と関連してどのような研究があるのか、韓国の新宗教と関連してどのような視点からの研究が多いのか、その研究動向にふれつつ、その特徴を考えてみたい。そして、日本における新宗教研究と比較してどのような特徴があるのかについても、若干述べてみたい。

1. 学会設立にあたっての研究総括と展望

『新宗教研究』の創刊号には、「韓国新宗教学会第1回学術大討論会」が掲載されている。韓国新宗教学会の設立に際して、今までの韓国新宗教の研究動向や現状についての認識が示されている。またそれを踏まえての以後の研究についての問題意識も示されている。自己認識とそれを反映しながら前へ進んでいこうとする姿勢がうかがえるので、学会が何を目指しているのかを知る大きな手がかりになると思われる。なお、第3輯には「1970年代以降の韓国新宗教の現状と展望」があるので、この内容についても補足的に見ておきたい。

①新宗教という用語

まず、議論的になっているのが「新宗教」と「新興宗教」の用語についてである。韓国では研究者によって、新しい宗教団体に対して、新興宗教、新宗教、民族宗教、民衆宗教、類似宗教など、様々な用語が使われている。これについての説明がある。

ユ・ビョンドクは、基調講演でこの問題に触れている。韓国は戦争前後までは韓国で発生した宗教を類似宗教と表現していた。以後徐々に新興宗教という用語へ変わった⁽⁵⁾。さらに最近では新宗教という用語が定着するようになったとする。日本の研究についても次のように言及している。日本では宗教が非常に多様な活動をしているが、それらは学問的によく整理されている。新宗教という用語が研究者によって社会的に定着していて、これがさまざまな用語が乱用されることの歯止めになっている。最近では新新宗教という用語も出ている。このような用語は自分が信じる宗教、あるいは宗教を知らない人が使う用語ではなく、宗教研究者による価値中立的な社会通念として定着している。

この上で、なぜ韓国はこのようなことができなかつたのか、あるいはなぜ韓国は宗教学者が多いにも関わらずこのような問題を社会通念として定着させることができないのかといった疑問が提示されている。日本では民衆宗教と新宗教を区別しているけれども、韓国では両者が混用されて使われている。そこで、当学会で今後はこのような用語の整理を学問的に進めていくこと、そして宗教についてわけ隔てなく宗教家と研究者が互いに対話できる場を作ることを期待すると述べている。

パク・ギョテは、新興宗教は否定的な意味として日本で使われ、そのまま韓国に入ってきて使われているとする。19世紀に世界規模でほぼ同じ時期に新しく宗教運動が起きたという意味では、通史的研究を行なう研究者の立場からは新宗教という用語が便利であるとする。また既成宗教ではないものという意味もあるとする。さらに民衆志向性を持つものとして定義づけている。

ユン・イフムは、韓国新宗教についての研究は1960年代以降だと言っても過言ではないという立場をとる。用語の問題はずっと議論されてきたが、New Religionの翻訳語にすぎない。本質は変わらないから用語の問題は議論の対象から外しても良いのではないかとする。そして、新宗教学会が関心を持つべきテーマとして、次の2つを挙げている。

- (1) 韓国新宗教は新宗教全体の特性の中でどのような意味を持ち、特性を持っているのか。
- (2) 既成宗教と世界宗教という概念の中で新宗教をどのように把握すべきか。

オ・ビョナムも、70年代初半までは新興宗教、新宗教という用語はあまりなかつたと

している。言論機関では類似宗教、異端、似而非、邪教などという言い方で報道した。1969年に文化広報部が「韓国類似宗教実態調査」を始めたことで、新興宗教という言葉ができたとしている。新しくできた宗教という意味では新宗教でも新興宗教でもいいので、概念に討論時間を使う必要はないと考えている。加えて民族宗教、民族宗団（教団に相当する表現）という言い方に対しては、民族をどこからどこまで規定して民族宗団とするか問題になるので韓国新興宗教、あるいは韓国新宗教と言えがいいと述べている。

イ・ウンユンもまた、新宗教、新興宗教という用語があるが、いずれにしても英語のNEWの意味にすぎないとする。言論機関で新興宗教を報道し、社会的に逆機能的な側面、また似而非的な側面という、悪い側面だけを強調したため、否定的な用語として刻印されただけであるからどちらでもいいという。一方、民族宗教という言い方もあるが、現在のグローバル時代に韓国中心に布教し、韓国中心の考えで宣教することができるかという視点から、民族宗教という用語は適切ではないとしている。

以上、様々な意見があるが、当学会の名にも新宗教という用語があるように、全体的には新宗教という用語が定着しつつあると言える。

②韓国新宗教研究史の傾向

イ・キョンウは、韓国の新宗教研究の歴史について述べている。西欧の神学概念であるReligionが日本で翻訳されて「宗教」となり、それが韓国にそのまま入ってきて使われるようになった。韓国で宗教と関連した内容が初めて掲載されたのは、1883年11月10日の漢城旬報⁽⁶⁾で、「宗教犯罪形成過程」についてというものであった。1920年に基督教新報に「宗教は何か」（カン・メ）、および「宗教の心理」（ホン・ビョンソン）が掲載され、宗教という用語が一般的に用いられるようになり、宗教に関する発表も始まった。1933年には、「宗教学は何か」（チェ・ピルウォン）、1937年「宗教論」（パク・ヒョンミョン）がある。

韓国最初の神学者とも言える人物としては、2人がいる⁽⁷⁾。チェ・ビョンホンは韓国の伝統思想と、伝統宗教とキリスト教との関係に焦点を合わせた『聖山明鏡』を著述することによって宗教学あるいは比較宗教学に近づいた。イ・ヌンファは韓国宗教史を韓国固有の仙教、仏教、道教、巫教、キリスト教として分類した。1912年には韓国宗教史を『百教会通』にまとめている。

このように日帝時代にも研究はあったけれども、本格的に新宗教研究が始まったのは解放後であるとする。チャン・ビョンギル、ユ・ビョンドク、イ・カンオなどがフィールドワークを通して韓国新宗教を調査した。悪役を演ずることとなったタク・ミョンファンをはじめ、キム・ホンチョル、ノ・ギルミョン、イ・カンオ、オ・ビョンムなどが、新宗教学研究の礎石を築いたと述べられている。

新宗教関連文献については、キム・ホンチョルによってまとめられている。それによると、特定教団に関する文献は約240冊あるが、東学系統が120冊でもっとも多い。一方、東学、甌山教、圓佛教による、教団側からの本が約240冊あり、また学者による研究書が285冊である。

村山智順が1935～37年に発表した『朝鮮の類似宗教』という資料報告書によって、類似宗教という用語やそこでの分類法が使われるようになったのは事実である。大体18系

統の 500 余の宗教があるということであるが、実態調査などによって新宗教研究を行なう時代に、このような系統部類を今後も続けるのがいいのかは考えるべきであると述べている。

新宗教を研究する人が、多様な真理をもつ教団について学び、学者と教団とが交流する姿勢はいい。けれども、宗教団体が作った研究所や研究員が多いので、そこでの研究業績あるいは実績は自教団の紹介、教祖、経典、儀礼研究など、ある意味自慢の場を設けるための場合が多く、客観的に教団や教理を正しく世に出すということには距離があったようである。今までは宗教教団の内容を知るための基本資料が貧弱であったこと、主観的な自己美化に汲々としていてそこに便乗する研究者の姿勢にも問題があった。これからは、宗教学的な研究、宗教哲学、宗教現象学、社会学的な側面からの分析、研究が必要であり、参与間接法や体験調査、アンケート調査、外部・内部という方向性を考えた研究も期待するというふうにとまとめている。

③ 1970 年代以降、韓国新宗教の現況と展望

第 3 輯の「1970 年代以降の韓国新宗教の現状と展望」には、イ・ゼホンによって、1970 年代以降の新宗教の状況がまとめられている。そこでは、韓国で新宗教が一般大衆に否定的な扱いをされた理由として、次の 3 つが挙げられている。

(1) キリスト教、仏教、神道だけを宗教と扱い、その他は類似宗教としてみていた日帝時代の状況の中で形成された否定的なイメージが現在まで続いている。

(2) 解放後、西欧をモデルとした近代化の過程で、西洋の宗教は合理的なもので、伝統的な東洋宗教は非合理的なものであるという論理と、それに基づいたキリスト教の宣教戦略、および偏向的な宗教政策によって、伝統思想を基盤としている新宗教は劣等宗教として認識された。

(3) 言論機関の問題として、似而非宗教に仕立てた報道傾向がある。

そして、70 年代の傾向を以下のように特徴づけている。60 年代までは日帝と米軍政、6.25 戦争、イ・スンマン（李承晩）の親米政権を経て、韓国新宗教は解散、萎縮、分裂し、被害者意識の中で隠遁と閉鎖の傾向にあった。しかし、70 年以降は西洋文化に対する批判的な意識と民族文化に対する自覚が生まれる。統一教（日本で統一教会と呼ばれている教団）の原理研究会、甌山教、愛天教会^⑧などが生じる。急激な高度技術の発展と経済成長にともなう逆機能現象によって神秘現象、UFO、前世などへの関心が社会風潮になる。圓佛教と統一教、大巡真理会などが総合大学を設立するなど、教勢の拡大と成長に積極的であった時代である。また創価学会、天理教、エホバの証人、安息教（セブンスデー・アドベンチスト）など、外来系の新宗教が本格的に活動を始めた時期でもある。

80 年代には、多様な新宗教が登場するようになるが、健康、富、安定などの個人の日常的な平安と関連した側面が救済財として登場する。個人中心的、現世中心的救済観、ストレス解消、心理的安定を保証する瞑想術のような心理療法などが流行る。国仙道と丹学仙院、天道仙法を強調する天尊会などがある。このような現象を 60 年代以降のアメリカのニューエイジ運動、70 年代以降日本の新新宗教の台頭と同じ脈絡で見たりもされる。

一方、キリスト教系新宗教は永生教、愛天教会のように摂理信仰に基づいたキリスト教から派生して終末論と神秘主義的な傾向を持つ新宗教が登場する。1987 年には審判の日

が迫ってくると主張して、私的な王国を設立し、企業を経営したが、教主と信徒と集団自殺をしたオデヤン事件があった。大巡真理会の布教の強制、献金強要、家出の助長などが理由で社会的物議を起こした時代である。

90年代には、80年代から始まった世紀末と関連した終末論が広がった。92年に携挙・イエス再臨などを主張したタミ宣教会の牧師に詐欺罪が適用され、社会の注目を集める。94年には似而非(サイビ)宗教に対して暴露と告発をした宗教問題研究所所長のタク・ミョンファン(卓明煥)の暗殺事件に、テソン教会の教徒が関わったとして、社会に衝撃を与えた。96年には永生教とアガトンサン⁹⁾の人権蹂躪(信徒を殺害)などの事件で騒がされた。大巡真理会は創教主の死後、教理論争と教団運営の主導権の内紛があった。天尊会は詐欺問題などで教祖と幹部が拘束されるなどの事件があった時代である。

このイ・ゼホンの論文によって、1990年代に至る韓国の新宗教が関わった社会問題を知ることができる。

2. 研究傾向

『新宗教研究』に掲載されている「特集」「研究論文」の論文の研究傾向は非常に多様である。内容によってこれを区分するのは簡単ではないが、中心的に議論されているものをいくつかとりあげる。それらを、とりあえず、①学説や研究史、②教団を対象にした研究、③特定の視点からの研究、の3つに分けておくことにする。

①学説や研究史

パク・ギョテ「新千年新宗教の世紀なのか」(第1輯)には、「新宗教的関心」あるいは「グノーシス的性向」と表現された宗教的想像力が、特に60年代以来、欧米のニューエイジ運動、あるいは日本で言われる精神世界と相通ずるものがあるという見解を示している。

チョン・ソクファン「新宗教の否定的範疇から見た新ナチズムの意味」(第3輯)では、ドイツのナチズムに言及されていて、ナチズムという現象はどのような根本原因から発生したのかを論じている。そして、新ナチズム¹⁰⁾と呼ばれるものについて、現代の外的内的カオスから生じた虚無主義的な暴力が随伴されたもっとも低級な新宗教の形態だとみなしている。新しい宗教の否定的範疇である新ナチズムを克服するための問いへとつなげられている。

チョン・ソクファン「西洋終末論思想の展開過程」(第6輯)は、西洋終末思想のモチーフがどのような姿に変形して展開されたのかを考え、その特徴を明らかにしている。終末思想の特徴について、危機意識(Krisenbewußtsein)、目的論的歴史観(Teleologische Geschtsauffassung)、宗教教育(Religionspadagogik)という、3つのトピックに限定して論じている。

キム・チョンソ「新宗教概念の宗教類型論的省察:北米から始まる国際的変化、様相」(第15輯)は、まず宗教類型論から新宗教の位相を明らかにし、新宗教として認識されてきたプロテスタントの教派らを紹介し、北米における国際新宗教の教派化¹¹⁾の傾向をまとめている。国際社会の中での教派と新宗教の関係は東アジア国家の宗教組織における理解にも示唆することがあるとする。

以上代表的な4つの論文を紹介したが、西洋の理論を用いて欧米の新宗教を紹介し、東

洋に及ぼす影響や、自国に何を反映すべきかを考えるものになっている。

②教団を対象にした研究

韓国新宗教教団を研究の対象にした場合は、教団の歴史、教祖、教理、思想、儀式、修行などを論じるものが大半である。内容的に教団の歴史、教祖の生い立ち、系統の展開といった全体的な流れを論じたものと、教団個別の教理、思想、儀式、修行といった具体的な内容を論じたものとに分けられる。かなりの数にのぼるので、どの教団がどれほどの頻度で研究対象になっているのかを、第3節に表としてまとめておいた。これによって、どの教団が研究の対象となることが多いかが一目瞭然となる。

まず、教団の歴史、系統の展開などに関する主な論文としては、次のようなものがある。「セジュパ（新主派）の略史」（第1輯）、「普天教成立の歴史的 성격」（第2輯）、「東学の教団分裂と韓国新宗教」（第2輯）、「水雲教の沿革と教理概観」（第3輯）、「覺世道の創道および教理に対する考察」（第4輯）、「キムペッブン（金百文）死後のイスラエル修道院」（第6輯）、「宇宙論に基づいた靈明教理の概要（靈主教）」（第6輯）、「檀君信仰系列の流れと展望」（第8輯）、「東学の成立過程に及ぼした儒学の影響」（第9輯）、「韓国道教の流れと新宗教」（第10輯）、「聖徳道の概観」（第13輯）、「經典の成立過程で見た更定儒道史」（第17輯）、「水雲教の經典成立過程に対する考察」（第17輯）など。

また個別教団の教理、思想、經典、修行などを扱ったものは数多く、量的にはこれが中心を占めていると言っている。こうした論文では、教団の独特の用語の説明がなされていることが多い。それぞれの教団の教理の理解には参考になる。たとえば、次のような思想、觀念といったものがとりあげられている。

金剛大道の「千中運度思想」「乾坤父母信仰」、統一教の「原理講論」、大巡真理会の「心体論」、水雲教の「弥勒觀」「解冤相生の精神」、大華教の「弥勒思想」、天理教の「轉輪王思想」、圓佛教の「相生思想（四恩）」、更定儒道の「道德文明」、甌山教の「相生思想」など。

さらに新宗教教団と民間信仰の儀礼を比較した論文や、新宗教と巫の關係に言及したものの、甌山宗団と圓佛教を比較したものもある。

③特定の視点からの研究

教団の歴史や教理等の分析にとどまらず、ある特定のテーマ・視点から分析を試みたものもいくつかある。これらはさらに3つに細かく分類することができる。

まず、一つ目は、呪文、易、仙思想、予言、檀君、巫俗、道教、治病、弥勒思想、生命思想と相生精神、修行、經典、女性觀などのテーマを扱った研究である。論文名をあげてみると、以下のようなものがある。

「新宗教と呪文」（第1輯）、「易と現代社会」（第5輯）、「韓国易学思想の概観」（第5輯）、「水と韓国人の清水文化」（第6輯）、「韓国宗教史の中での檀君民族主義」（第8輯）、「済州の巫俗信仰と新宗教」（第9輯）、「伝統的な病氣治療法が新宗教に及ぼす影響」（第10輯）、「弥勒仏様の良心・真実・正直の行化神通力道德流化の世を創造する弥勒大道」（第11輯）、「東アジア宗教の生命思想と相生精神－東アジアにおける相生精神に関して」（第12輯）、「新宗教に見られる神仙思想」（第13輯）、「新宗教の經典に対する概説」（第16輯）、「プロジェクトとしての現代の中で見た韓国新宗教の女性觀:金剛大道を中心に」（第19輯）、

「大極旗 4 掛図に含まれた未来学」（第 19 輯）、「韓国人の符籙信仰の歴史」（第 19 輯）。

二つ目は、一般社会的視点からのもので、平和統一、文化芸術、社会改革、韓国的靈性、ポストモダンなどと新宗教との関わりについて研究がある。これもいくつか論文名をあげてみる。

「平和統一と新宗教の役割」（第 4 輯）、「南北交流と新宗教の課題」（第 4 輯）、「新宗教における文化芸術の現況と展望」（第 7 輯）、「新宗教と映画 I : イムクオンテク（林權澤）監督の映画〈開闢〉の場合」（第 7 輯）、「新宗教と音楽」（第 7 輯）、「新宗教と踊り：新宗教におけるしぐさの美学的構造と思想原理」（第 7 輯）、「儒教と韓国人の宗教心性」（第 7 輯）、「ポストモダンと新宗教」（第 19 輯）、「ポストモダン時代の新しい宗教現象」（第 19 輯）、「敗戦後日本のポストモダニズムと宗教研究」（第 19 輯）など。

この中で注目したいテーマは、文化芸術と関連した論文である。まず、ユン・スンヨン「新宗教における文化芸術の現況と展望」では、70 年代以降多様な研究を行なわれるようになったが、新宗教の芸術については関心が無かったと指摘されている。そして新宗教の儀礼文化とそれと関連した文化芸術の現況と展望が示されている。伝統社会での宗教は社会中心の世界観として作用され、社会と文化を構成する基本原理として作動する。文化芸術史は宗教文化の芸術史と言っても過言ではないといい、展開過程を紹介する。踊りは国家の慶祝日、重要宴会や儀式になされた。そして儀式的な宮中舞踊と呪術的で年行的な民俗舞踊へ発展した。仏教では齋の儀式の踊り（梵唄による梵舞）、儒教では門廟祭礼、文舞、武舞、そして民俗舞踊はサルプリ、農楽、巫俗踊りといったようにである。音楽は巫俗音楽、仏教音楽、儒教音楽、基督教音楽として区分されている。

シン・クァンチョル「新宗教と映画⁽¹²⁾ I : イム・クオンテク（林權澤）監督の映画〈開闢〉の場合」も興味深い。『開闢』は、東学の 2 代教祖であるチェ・シヒョン（崔時亨）の生涯と思想に焦点を当てた作品である。日本人の映画評論家である佐藤忠男は「崔時亨の非暴力抵抗思想を評価することに意義があるし、東学思想が韓国で自発的に創出された民主主義の原理であったことを表したことに最大の意義がある」と論評している。歴史学者のイ・イファは歴史意識の不足と致命的な歴史的過ちを指摘し、東学農民戦争の革命性に焦点をおいた。映画評論家のイ・ヒョインは、当時の社会における歴史的状況を東学という宗教集団中心に把握することによって正確な歴史解釈の道からずれていると評価している。映画〈開闢〉は東学を宗教運動としてみていて、その中にある「新しい」教えが変革を渴望する民衆の期待に応えたと強調している。そして開闢に描写されている東学と崔時亨の生涯について登場人物の位置づけにも焦点において分析している。

なお、この映画については、井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』（弘文堂、2009 年）で、川瀬貴也が紹介している。東学の発生背景と教えについて説明され、甲午農民戦争を中心とした東学の展開に焦点が当たっている。

三つ目は、少数ながら社会学的視点からの研究が見られることに触れたい。キム・ヨンファン「後天開闢の弥勒信仰に関する研究」は、韓国新宗教によく見られる後天開闢思想を用いながら、後天開闢の地球倫理基本原理と方向を提示し、アンケート法と文献研究方法を活用し、後天開闢思想に関する現場での教育指導方針と地球倫理を批判的に検討している。社会学的方法が徹底しているとは言えないが、忠北大学の大学生、大学院生 500 名を対象にして 7 問のアンケート調査を行ない、学生の後天開闢に対する考えや倫理意識

との関係、地球倫理教育で強調する内容についてまとめている。

チョン・ミョンス「ポストモダン社会の宗教文化に関する省察：ポストモダニズムが宗教に及ぼした影響と展望を中心に」では、ポストモダニズムの発生が既存の宗教思想と無関係ではないことに注目し、これが現代宗教の変貌にどのような役割をはたしているのかを考察している。

3. 研究対象となっている教団

『新宗教研究』では、どのような教団が主たる研究の対象になっているであろうか。これを分かりやすくするため、各号ごとに研究対象となっている教団を一覧にしてみた。便宜上、韓国宗教と外来宗教の2つに分けて表にした。それぞれ対象となっている論文の数が多い順に並べた。表の数字はその号に出ている論文の数を示している。

・韓国宗教

輯	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
統一教 ⁽¹³⁾		1		1	1	1	2	1	1	1	1	1		1		2	2	2	1
甌山教 ⁽¹⁴⁾		2		1	1	1	1	1		1		1	1	1		1			
大巡真理教 ⁽¹⁵⁾					1	1		1				1	2			1	1	1	1
金剛大道 ⁽¹⁶⁾	1				1	1				1	1	2				1			
東学 ⁽¹⁷⁾		2			1			1	1	1								2	
水雲教 ⁽¹⁸⁾			1						1		1	1	1	1			1		
圓佛教 ⁽¹⁹⁾				1		1	1					1	1					1	1
普天教 ⁽²⁰⁾		3		1	1									1					
大倮教 ⁽²¹⁾				1				1						1		1			
更定儒道 ⁽²²⁾												1		1	1		1		
弥勒大道 ⁽²³⁾				1							1								
聖徳道 ⁽²⁴⁾													1				1		
天尊会 ⁽²⁵⁾	1																		
セシ ュハ ⁺ (新主派) ⁽²⁶⁾	1																		
太極教 ⁽²⁷⁾			1																
大韓一主平和国 ⁽²⁸⁾					1														
イスラエル修道院						1													
霊主教 ⁽²⁹⁾						1													
大華教 ⁽³⁰⁾											1								
天道教 ⁽³¹⁾														1					
龍門山祈祷院 ⁽³²⁾																		1	
檀君信仰関連					1			2						1					
仏教関連				1		1					1								
キリスト教関連										1									
儒教関連							1			1									
道教関連										1									
巫俗関連								1	3										

以上の表からも分かるように、特に統一教を対象にした研究がもっとも多く、19本に上る。以下、甌山教（12本）、大巡真理会（10本）、金剛大道（8本）といった順になっている。教団研究における全体的傾向は、第2節で紹介したように、教団紹介、教祖の生涯、思想、教理、経典研究、儀式、修行などが主流を成している。研究者の間では注目されている教団としてまず水雲教があげられるが、韓国新宗教の嚆矢とも言える東学の思想を受け継いだ教団であるので、その教理や思想の研究が行われていると思われる。統一教と大巡真理会は自教団の教育機関によって育成する教団内の研究者によって行われることと教勢の拡大と社会的なスキャンダルによる注目から対象になるのではないかと思われる。そして、新宗教同士または、新宗教と既成宗教である仏教、キリスト教、そして儒教、道教、巫俗との関わりや思想などを比較する研究もある。

・外来宗教

輯	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
天理教	1	1	1				1	1	1	1	2								
組合教会		1																	
如来教														1					
大本教															1				
法輪功										1									
バハイ教																			1

『新宗教研究』で扱っている外来宗教としては、日本と中国の新宗教がある。上の表でわかるように天理教が圧倒的に多い。天理教については主に「新宗教資料」で紹介しているが、天理教の教理や思想については「特集」と「研究論文」でも取り上げている。掲載内容としては、日本の天理教が1893年里見治太郎という人物によって最初に韓国の釜山に伝来されたこと。その過程や、日韓合併期前後と3.1独立運動以降の布教状況、そして解放後の大韓天理教の発生とその背景、日本側の韓国伝道庁の設置における問題点などを紹介している。8輯には天理教の世界、教義、原典、教学の思想などについて考察している。

第9、10輯には解放後の大韓天理教の創設および初期過程を紹介している。解放後の社会変化による教団維持の受難時代を経て、日本の天理教から独立し、自主、自立の努力によって、1952年に大韓天理教連合会という名で教団を創設する。1954年10月に大韓天理教本院と名を改称して、より自主・自立できる中央集権的独立教団にしようとしたが、反対派の反発にあう。1959年に大韓天理教本部に教名を改称し、財団法人大韓天理教団を設立、認可されて現在に至る。

次の日本組合教会は、アメリカの会衆教会の日本での名称であるが、1878年日本に宣教を開始し、1886年に日本組合教会として誕生した。この組合教会の韓国での活動を概略している。日韓合併後、朝鮮に宣教活動を開始したが、解放後は1904年にソウルにキョンソン組合教会を設立するなど、日本組合教会の朝鮮宣教を過程とその中に内在している帝国主義について論じている。（第2輯）

日本の如来教については、1802年に開教した民衆宗教の一つであり、成立契機と宗教思想の成立過程、如来教の歴史的役割と位置について論じている。(第14輯)

日本の大本教と中国の道院・世界紅卍字会が戦前期においてお互いの国に布教を行うなどの提携過程を示しているが、それは日本の大陸侵略の政策によるものであり、民衆のことは考えてない問題点がある。しかし、東アジアの伝統的宗教風土である平和的共存、万教の一致思想に基づいての二教団の提携運動であるゆえ、現代の宗教多元主義の理念を成就したと肯定的に評価できる側面もあると言える。(第15輯)

中国の新宗教についての研究は、1992年に中国人の李洪志が創始した気の修練法、修練団体である法輪功の展開と「公論場」という理論から見た法輪功について論じている(第10輯)。そして中国伝統宗教の中によくある「生」の精神を人間と天道の関係、人間と自然の関係、人間との関係を明らかにしつつ、生命の意義と生存の知恵などについて論じている。(第12輯)

終わりに

このように、韓国新宗教の研究の近年の動向をみると、テーマはかなり多様であることがわかる。研究対象になっている教団の偏りはあるものの、幅広い視点から議論がなされていると言っているのではなかろうか。まだ欧米や日本の研究とは異なった独自の視点に基づく研究が展開するのは、これからであると思われるが、西洋の理論や日本の新宗教研究の動向についての関心は、今後も継続すると考えられる。日韓相互に研究を参照する度合いをこれまで以上に深めていく必要を感じる。さらに中国の新宗教や新宗教研究にも関心を持っており、少数の論文があった。1つの学会誌で韓国の新宗教研究の動向をすべて把握することは困難であることは言うまでもないが、おおよその傾向は、これによってつかむことができるのではないかと考える。

注

- (1) 当学会のホームページ (<http://www.newreligions.org/>) を参照。韓国と世界の新宗教を研究して診断することと、定期的な学術発表を経て学術誌を刊行することで、人類の健全な精神文化の創造に寄与することを目的としている。主な事業は、①新宗教の調査研究、②学術誌及び関係図書刊行、③定期学術会議(春・秋年2回)及び講演会議開催、④国際的な研究交流、⑤関連資料収集、分類、保存、展示活動、⑥新宗教研究に関連した教育機関の設立推進などである。
- (2) 『新宗教研究』第1輯～第20輯までの全目次は、日本語に翻訳し『ラク便り第42号』(2009年5月)に研究ノートとして紹介したので、そちらを参照していただきたい。
- (3) この会議に際して韓国新宗教学会より日本文化研究所に『新宗教研究』の創刊号から最新の第19輯までが寄贈された。
- (4) 書評の内容については詳しく紹介しないが、第4輯にキリスト教系新宗教の新たな地平『韓国メシア運動史研究』(チェ・ジュンヒョン、考える百姓、1999)、物語として語られる宗教経験『韓国人の宗教経験—天道教と大倭教』(チャ・オクスン、ソカン社、2000)、第6輯に『韓国新宗教とキリスト教』(キム・スンヘ他、2002)といった書評がある。

- (5) 新興宗教という用語の中に何が含まれるのかという問いでユ・ビョンドクが60年代に約200名の各界の人にアンケートをとった。その結果の分析によると、半分は類似宗教・邪教のような意味、半分は正しい宗教の道を歩むものだと考えていた。
- (6) 1883年に創刊された韓国最初の近代新聞。旬刊であった。
- (7) この二人については、シン・クァン Cholによる「イ・ヌンファ、チェ・ビョンホン教授の比較宗教論」という論文の中に詳しい内容がある。
- (8) チョン・ミョンソク（鄭明析）によって1978年から宣教を始められ、1980年2月に愛天教会が設立された。日本では摂理として知られている。
- (9) 教主であるキム・キスンが1978年全北のイリ市でサクバツギョという宗教をつくって運営してきたが、1982年京畿道イチョン市に4千坪を購入し、アガ農場を建て、地上天国と宣伝して信徒を集め、新しい宗教団体をつくった。
- (10) ヒトラーのナチズムが当時の大衆に西欧のキリスト教が信仰的支柱になれなかった時に新しい世界観を提示した代替宗教として見るならば、新ナチズムはそれを踏まえ、科学化された現代を否定する新しい宗教形態と解釈しているようである。
- (11) 現在のアメリカ社会には主流 (mainstream) 宗教と周辺 (fringe) 宗教との区分がどんどんなくなっている。キリスト教教団が新宗教的特性を受容する反面、新宗教が既成教団の社会的機能を共有する。これも新宗教的立場からみると‘教派化 (sectarianization)’といえる。(本文引用)
- (12) 韓国で新宗教を素材にした映画としてあつかわれているのは計5本である。白白教の映画が2本、東学関連が2本、甌山教教祖の生涯を映画化した1本である。
- (13) 1954年5月にムン・ソンミョン（文鮮明）によって「世界基督教統一心霊協会」という名で宣教活動を始める。58年は日本、59年にはアメリカにまで宣教地域を広げていく。文化活動や芸術活動、教育機関などを設立する。世界の信徒たちを合同結婚させることで有名である。唯一神である創造主ハナニムを人間の父と信じ、新・旧約聖書を経典とする。イエスが韓国に再臨すると信じ、人類世界は再臨するイエスを中心に一つの大家族社会になるという。ハナニムの救援摂理の最終目標は地上と天国に悪と地獄をなくし、善と天国を建てると信じる。1997年には世界平和統一家庭連合と教名を変更して今日に至る。
- (14) カン・イルスン（姜一淳、号は甌山 1871～1909）によって1901年に創設される。彼は自分が民衆を救うために金山寺弥勒仏として降臨したとし、予言と病んだ世の中を治療する医術を世界救済の手段として活用した。追従者たちは天地開闢を通しての地上仙境が到来することを信じていたが、1909年に姜一淳の死後、解散して様々な分派教団ができた。
- (15) パク・ハンキョン（朴漢慶）は、チョ・チョルゼ（趙哲濟）が釜山に創設した太極道に入室して信頼を得て2代目の都典になるが、信者からの不満や告訴により、教団を離れる。彼の追従者をソウル集団移住するなど教団創立の準備をして、1969年に4月に大巡真理会を創設する。飛躍的な発展を遂げ、84年、89年に高等学校、90年にテジン大学を設立し、その他各種の社会事業を行う。信仰の対象は九天上帝で、この宇宙を総括する一番高い位置にいて、三界を統一して運化を調練する。
- (16) 1910年に創道主であるイ・サンピル（李尚弼）によって忠南のノンサン郡で金剛大道を創設した。檀君と太極を崇拝し、儒仏仙の三合一の真理と天地人三才合応の法則を究明し、万法帰一の原理として全人類を教化する。階級打破と男女平等を主張した。

- (17) 1860年にチュ・ゼウ（崔濟愚、号は水雲 1824～1864）によって1860年に創設。侍天主信仰を中心に後天開闢、輔国安民、広済蒼生などを宗旨にして、民族主義的、社会開闢的な思考を強く持つ宗教として出発する。1864年に崔濟愚は処刑される。その後2代目のチュ・シヒョン（崔時亨）によって1894年には教祖伸冤運動と東学農民戦争を展開。農民戦争の敗北と1898年の崔時亨の死により沈滞期に入るが、1905年に天道教として再生する。この過程で教団の分裂がおこり、様々な教団ができる。
- (18) 東学の分派教団であり、教主のイ・サンヨン（李象龍）は自分が崔濟愚の生まれ変わりだと言い、1920年に開教。1937年に日帝の強圧により廃止令を受けて儀式、教名、礼服などが一切禁止され、浄土真宗に編入されたりするが、45年に水雲教として活動を再開する。教理は儒仏仙の合一。自分の体にハナムムを受けるという侍天主信仰が特徴である。
- (19) 1916年4月にパク・チュンビン（朴重彬、号は小太山）によって創始された新宗教。「物質が開闢される精神を開闢しよう」という開教標語のもと、宗法師である小太山が悟った真理の究極的な宗旨である法身仏一圓相が信仰の対象であり、修行の見本になっている。1924年には仏法研究会という看板をかけて宗教活動をするが、解放後に圓佛教と教名を変え活動をする。教勢はアメリカ、日本、ドイツ、カナダなど海外にも広がり、圓光大学校、圓光保健専門大学などの教育機関、各産業機関、慈善機関、文化施設などがある。
- (20) 甌山教のカン・イルスン（姜一淳）の死後、彼の妻である高氏にカン・イルスンの霊が降臨したとして、弟子たちが集まり、1914年に仙道教（別名、太乙教）が形成される。教団の教勢が拡大されると、姜一淳の追従者であり、高氏の従弟であるチャ・キョンソク（車慶石）が教団を掌握して教名を普天教と改称して1921年に開教。1922年普光雑誌を発行するなど、1924年までは活発な活動を展開するが、独立運動をするなどをしたため類似宗教として見なされ、幹部たちの離脱と財産権などの問題も生じた。1936年に車慶石の没後、朝鮮総督局の類似宗教解散令によって教団が解体されるに至る。
- (21) 1909年1月にナ・チョル（羅喆）が天に祭祀をあげて檀君教という名で檀君信仰を継ぐが、1910年8月に大崇敬に改名して活動を始める。韓民族は天孫天民であり、天父思想と儒教・仏教・仙教の三教の合一思想がある。
- (22) 1929年にカン・テソン（姜大成）によって創立された儒教系新宗教である。信仰対象は「仙堂宮（明賢の神霊が降りて経綸を受ける者は世界と百姓を救済できる）」で、教理綱領は「時運氣和儒仏仙東西学合一更定儒道」である。
- (23) 弥勒大道の正式名称は「弥勒大道 金剛蓮華宗」である。1984年に天地様が降臨したという聖域と思われる仁川の清涼山で創教した。信仰対象は「創造主 天地様」と「救世主 弥勒様」である。
- (24) 1952年5月にキム・オクゼによって創道され、1960年に聖徳道教化院を設立する。1964年に「聖徳道報」を発行する。
- (25) 創造主である天尊様が過酷な祈祷と修練、霊界と神界に対する経験を通しての勉強、気で病氣治しをする過程をさせて多くの聖職者と信徒を増やしてきた民族宗教である。
- (26) セジュパというのは、新しい主様を信じる派という意味をもつ名前で、精神の病常がキリスト教会に通い完治し、天から啓示を受けたキム・ソンド（金聖道）という女性が救世主として信じられた。1920年代前半期に始まり、1937年から6、7年間は日帝総督部の宗務課に登録され宗教団体として活動をし、1944年から韓国戦争までは‘腹中教’と呼ばれ、1950

年以来 90 年には韓国で一部が存続している。

- (27) 教主であるチョ・ Cholゼ（趙哲濟）が普天教の信者であるキム・ヒョク（金赫）という人物に会い、甌山の教えを知る。修道生活をして 1917 年に太極大道を得道して、1918 年には無極道と看板をかけ甌山教を布教して教勢を拡大していく。1925 年には無極大道に教名を変える。1936 年に日帝の弾圧によって教団が解散されるが、45 年解放後 1948 年に釜山で太極道という教名で布教を始める。宇宙の無極原理を基礎にして上帝である甌山を信仰の対象にしている。
- (28) キリスト教系新宗教であり、ハン・チョンサン（韓宗山）が 1964 年 10 月にハナムの家公会という名の団体を創立する。69 年 6 月に世界一家公会、1980 年 8 月に世界一主平和国の樹立を宣言した。同年 11 月に大韓一主平和国、また 1994 年 2 月に宇宙一主平和国と改称したが、ほどなく大韓一主平和国に戻して今に至っている。
- (29) イム・チュンセン（林春生）が 1937 年 3 月に創立総会を開催し、教名を霊主教とした。解放前までは目立たないように霊導を布教したが、解放後は「霊主教 霊命堂」という看板をかけ布教する。信仰対象はヨンハナム（霊命任）であり、忠、孝、烈と敬天子民の道理を実践するという目的がある。
- (30) ソン・ウンソクは崔濟愚の徳を追慕するために教名を濟愚教として教主になり布教するが、1920 年に龍華教に改称する。1923 年にユン・キョンジュン（尹敬重）がチリ山で得道して龍華教に入信する。彼が入信した後大華教に改称し、自費を投資して本館大華教堂を建設して弥勒仏の教都を樹立するなど教勢を広げていった。大華教は、弥勒仏本尊に帰依して誠心修道を通して龍華世界を建設しようとする。
- (31) 1860 年にチェ・ゼウ（崔濟愚）によって創道された東学を 3 代教主であるソン・ビョンヒが 1905 年に天道教として改創して成立する。
- (32) 龍門山祈禱院運動の礎石になったのは 1940 年に組織された愛郷塾という団体で、「ハナム愛」「土愛」「民族愛」というモットーで学生を教える一種のキリスト教的農村啓蒙運動団体であった。6 ヶ月で解散するが、解放と韓国戦争後、教主であるナ・ウンモン（羅雲夢）は、入神、予言、幻想などを伴う神秘体験をして、本格的に地方へと巡回をするなど集会を開いた。この時から龍門山祈禱院という名が知られるようになった。